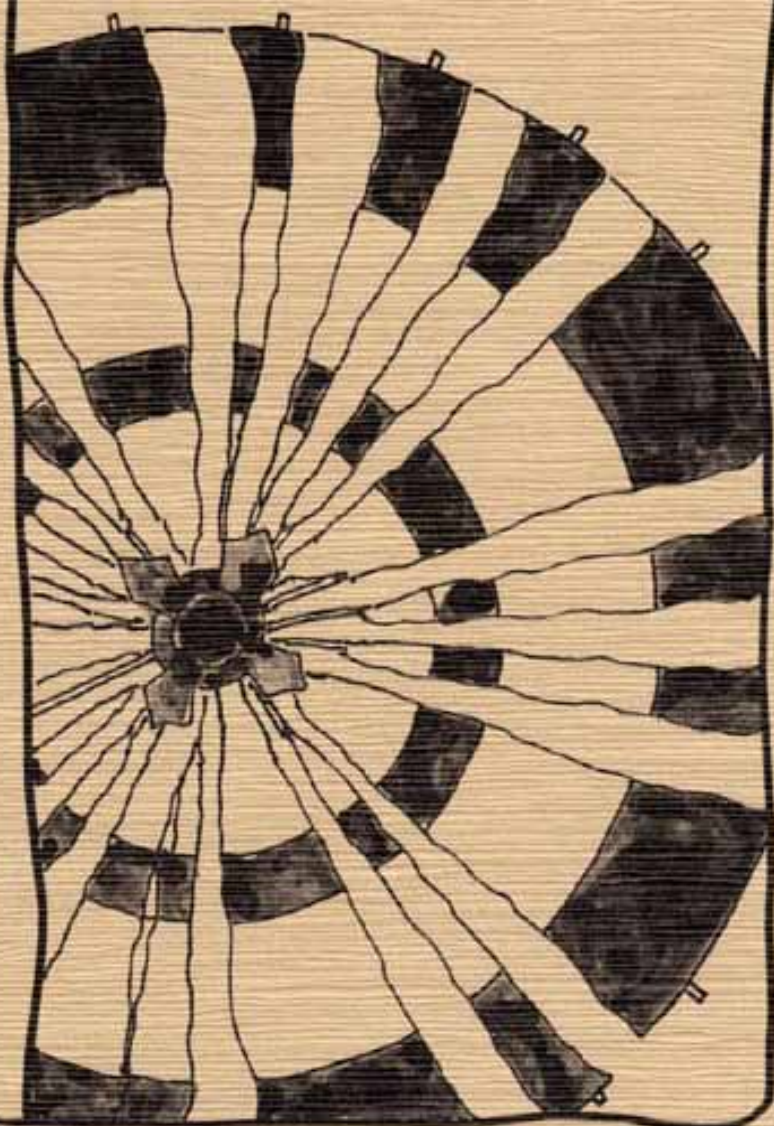


やぶれ傘



一三五号

二〇二三年十二月

菊膾

廣瀬雅男

秋の日の雲はちぎれてちりぢりに
鯊釣りの玉浮きつつと走りけり
人声を遠く近くに秋の山
遠く海見えてキチキチバツタ跳ぶ
石露の花猛犬注意の札近く
ひとり飲む酒にも慣れて菊膾
柚子実る小学校の垣根かな
補聴器を外し風聞く秋の暮
手をつなぎ子らの駆け行く草紅葉
柿紅葉農家の庭で犬が吠え

冬の夜

子はひよいと持ち上げられて秋うらら
弁当に占地ひよろりと入りゐる
シャツターの下ろされてゆく十三夜
冬立てりいつもより濃い抹茶ラテ
冬の蟻出来たばかりの切り株に
冬の夜の電気ポットのシルエツト
猫がくる日向ぼつこをしてゐれば
冬ぬくしぼんやりとする辞書の文字
いつまでもドトールに居る冬の夜
隣席は急に静かに冬灯

泡立草

天野美登里

新松子二階の窓に灯りつき
草野球ネットの裏の泡立草
風少しコスモス畑過ぎゆけば
読みづらき本を閉ぢたる暮の秋
紫蘇は実に猫はゆつくり畑隅へ
魔法瓶の栓ゆるくなる暮の秋
天窓のひかりは土間へ秋惜しむ
立冬の亀は流れに首のばす
酒蔵に夜来たりけり神の留守
庭園の池にこぼるる姫椿

小春日

藤井美晴

朝冷えの鉄の手摺に触れてゆく
鹿威ししおどしといふも長閑にばつたんこ
黄楊垣つげがきの脇の真つ赤な唐辛子
街川のよどみに映る秋ともし
坂道の曲がるところの柿紅葉
「新蕎麦」の墨書ガラスに貼られたる
山鳩が歩く小春の煉瓦塀
海峡の小春高速船でゆく
小春日の花火の音と鶏のこゑ
石橋を渡る途中の鳩のこゑ

銀杏の実

渡邊孝彦

校舎から太鼓打つ音曼珠沙華
秋のてふ駐輪場の屋根掠め
灯火親し人体模型教室に
丘陵でありし更地の泡立草
カーテンに植木の葉影秋日濃し
坂下の小さき人影吾亦紅
銀杏の実父のミットヘストライク
くろぐろと秋の山並ふもとの灯
トーストの屑を拾ひて冬に入る
鉄塔の下は空つぽ小六月

安藤 久美子

ゆりかもめ

達筆の看板に寄る菊花展
がさり踏む梧桐の大枯葉かな
築地にはおでんの小鉢附くランチ
十階の病室よりの冬景色
右左なき手袋をまた嵌める
いつもの店ポイントアに華やぎて
雲多き冬空にふと遠き国
ゆりかもめ橋の向かうに橋がまた
お見舞ひは午後に勤労感謝の日
内外の掃除拂り冬ぬくし

初もみぢ

有賀昌子

初もみぢ寄進の瓦組まれゆく
甥つ子から届きしシャインマスカット
うたた寝の中で鳴いてるちんちろりん
かはらけを投げる先には溪紅葉
水澄みて水底の魚ひらひらと
蔦紅葉古城再びよみがへり
床を這ふ魚焼く匂ひ秋めく日
夕暮れの水引草の影長し
うす紅のコスモス好きと言ふ少女
人工関節入れてリハビリ冬温し

白石正躬

小春日

乳母車を止めて銀杏拾ひゐる
小春日の利根川へ石投げてみる
「きましたよ」と介護車が着く秋の暮
秋夕焼犬がぞろぞろ土手を行く
芋の莖戸板に並べ干しにけり
ガラス越しの明の明星ひとつ澄む
しをればまた切つてさす草の花
柿三個残して空は今日も晴れ
秋晴れのどこかに帽子わすれきて
土手下の銀杏紅葉が散り始め

秋茄子

秋山信行

鈴虫のこゑに聴き入る小半時
手の平にしばし眺めるマスカット
秋深し太極拳の肅々と
雨やんで陽の差しきたる秋茄子
それ球を靴で蹴とばす秋の暮
一回り畑を見にゆく野分中
熟柿採る一つ落としてまた一つ
自転車で来てしばらくを零余子採り
脇道のどこからとなく虫のこゑ
地下足袋をしつかり絞めて秋祭り

カンツォーネ

箕田健生

秋雨に濡れてゐるなり陽明門
少しまた痩せてゐる友秋の夜
山茶花の散り敷く道を往診す
秋の宵声のたかまるカンツォーネ
天高し無人のボートコース場
紅葉散る上野の森の美術館
行く秋のバンドネオンのタンゴ聴く
日の暮れのバス待ちをれば初時雨
待合室の患者は途絶え暮早し
唐風の館は秋の池の先

久々に伸ばす背すぢや秋裕
貫井照子
白桃のつるりと皮のむけて晴
豊屋の肘に大胝秋うらら
幕間にふと手にしたる秋扇
林立のビルより昇る月赤し
栗ごはんまづ仏壇に供へけり
寺へ行く林檎畑を右にして

野口希代志
小六月ちぢまりかけた背を伸ばす
賽銭に一セントあり秋彼岸
鈍行の三分停車ちちろ鳴く
秋暑しサツカー場に救急車
天高しスクランブルの交差点
うろこ雲ふわりふわりとグライダー
芒原風車ゆつくり廻る午後